

八重山諸島における遠距離通耕に関する研究動向

土屋 純

一、はじめに

遠距離通耕とは、居住地から離れた場所に耕地を所有し、通勤して農業をおこなうことである。八重山諸島では、稲作をおこなうため遠距離の通耕が一九七〇年代まで行われていた。八重山諸島における遠距離通耕の起源ははっきりしないが、琉球王国において人頭税が行われはじめた一六三七年から盛んになったとされるが、それ以前から行われていたのではないとも言われている。八重山諸島における遠距離通耕に関する実証的研究に関しては、人文地理学によるものが代表的である。その代表的な論文は、浮田（一九七四）と藤井（二〇一〇、二〇一四）である。

本論考では、おもに浮田（一九七四）、藤井（二〇一〇、二〇一四）の2人の研究者による論考を比較しながら、遠距離通耕の起源やその実態についてレビューするとともに、著者なりに遠距離通耕について考えていきたい。

二、遠距離通耕の研究動向について

遠距離通耕について注目した研究は、浮田（一九七四）、藤井

（二〇一〇、二〇一四）だけでなくさまざまな分野で行われてきた。しかし、実証的に遠距離通耕について分析しているものは少ない。実証研究として遠距離通耕がどのように分析されてきたのか、浮田（一九七四）、藤井（二〇一〇、二〇一四）を紹介していきたい。

一）浮田（一九七四）の紹介

まず、浮田（一九七四）の研究について紹介したい。浮田（一九七四）では、第一に、消滅しつつある遠距離通耕の実態を把握することが重要であると考え、インタビュ調査やアンケート調査を実施して詳しい実態把握をおこなった。浮田自身によるインタビュ調査や農業高校の農家出身者へのアンケート調査によって明らかにされた遠距離通耕の実態は、現在では大変貴重な資料となっている。浮田（一九七四）から引用したものである図1は、八重山諸島における遠距離通耕の全体像を示すものとなっている。そして研究論文として最終的に、①遠距離通耕の発生要因、②船による西表島への通耕、③陸路での石垣島への通耕、の3点について論をまとめている。

①の発生要因についてであるが、浮田（一九七四）は主に「マラリア」、「人頭税」の2つの要因を指摘している。八重山諸島においては、山があり、水があり、水田がある西表島と石垣島北部はマラリアを媒介するアノフェレス蚊が生息しているためマラリアの有病地であった。そのため西表島と石垣島北部は長く人が定住することができない場所であった。それに対し、山

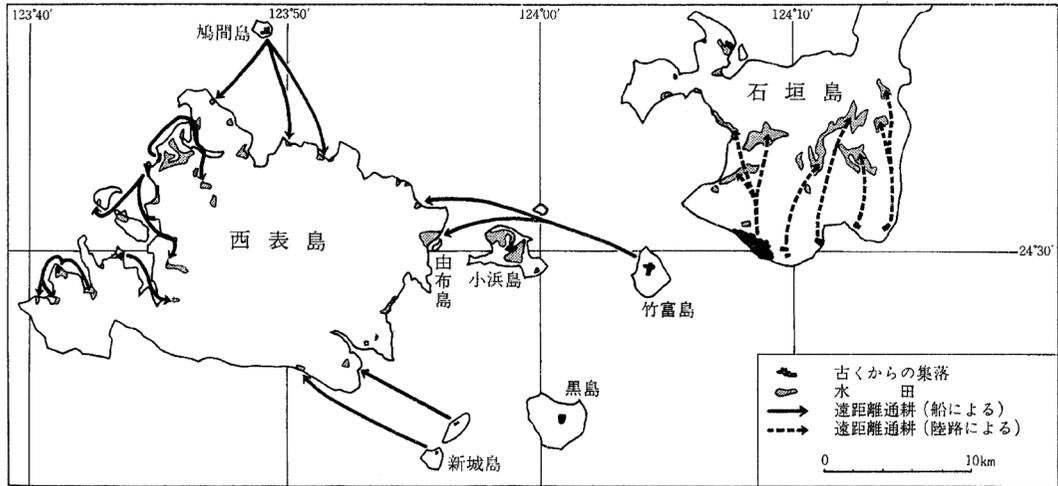


図1 第二次大戦の直前における遠距離通耕の概況、浮田（1974）より

から離れている石垣島南部や、隆起した珊瑚石灰岩の平坦な島である竹富島、新城島、鳩間島はマラリアの無病地であった。遠距離通耕とは、マラリアの無病地から稲作ができる有病地へ通耕するものである。

つぎに「人头税」であるが、八重山諸島では一六三七年から一九〇二年にかけて人头税が課せられていた。15歳から50歳の男女に多くの米や反布を一律に賦課されたため、八重山諸島の人は長く苦しめられた。水田の有無に限らず米を上納しなければならなかったため、水田のなかった地域では遠く離れた場所に水田を確保して通耕しなければならなかった。このように浮田（一九七四）では、マラリアと人头税という八重山諸島の人々に課せられた要因によって遠距離通耕が行われてきたとしている。

②の船による西表島への通耕では、通耕でもちいた船・航行の実態、田子屋での泊まり込みと農作業、新城島・竹富島・鳩間島・黒島における通耕の実態、について紹介している。古老などからの聞き取りから、かつては松船（松の木を削り貫いたもの）を用いていたが、その後杉の板で作ったテンマセンが用いられるようになり、第二次世界大戦後はエンジン付きのサバニが用いられたことを明らかにしている。そして田小屋での泊まり込みと農作業について農事カレンダーを作成して検討している。田うち、種おこし、田植、田草取り、収穫の作業のために西表島まで船で移動していた。田植や収穫などの人手がかかるときには男女ともに移動して農作業を行ってきたことを明らか

にしている。このように、第二次世界大戦前から戦後一九七〇年代までの実態が生き生きと明らかにされている。

③の陸路での石垣島への通耕では、通耕先の状況、通耕の交通手段、通耕の時期・期間、農家への詳細な聞き取り調査、について紹介している。石垣市登野城の農家2件への詳しい聞き取りによって、移動手段の多様性や、一九六〇年と一九七三年における作付けの状況を比較することによって、農家単位での遠距離通耕の実態が明らかにされている。このように浮田（一九七四）は、消滅仕掛けていた遠距離通耕の実態を調査した貴重な研究である。

二) 藤井(二〇一〇、二〇一四)の紹介

続いて、藤井(二〇一〇、二〇一四)について紹介したい。藤井(二〇一〇、二〇一四)では、貴重な実態調査であった浮田(一九七四)では明らかにされていなかった遠距離通耕の実態やその意味について検討することが中心のになっている。特に、人頭税が終了した明治期以降における実態を、土地台帳を中心に当時の様子がわかる資料を元に検討しているところに特徴がある。

藤井の一連の研究における枠組みとして八重山諸島を「高い島」と「低い島」の2つに区分し、それぞれの生態的な特徴を把握しながら、高い島と低い島のつながりについて分析することによって、遠距離通耕の意味について検討している。なお、藤井(二〇一〇)では竹富島、鳩間島における遠距離通耕の実

態を中心に分析し、藤井(二〇一四)では新城島における遠距離通耕の実態を分析するとともに高い島と低い島の関係性と生態適応についてまとめている。

浮田(一九七四)における遠距離通耕の発生要因として指摘している「マラリア」「人頭税」という八重山諸島の人々が抱えてきた条件によって発生したと解釈しているのに対し、藤井(二〇一〇、二〇一四)では遠距離通耕は「低い島」の人々が生活を成り立たせるために行ってきた営為であると指摘する。すなわち「低い島」の限られた条件の中で、「高い島」における稲作や、森林から得られるさまざまな資源を入手するために、遠距離通耕は行われてきたと指摘する。課せられた条件の中で止むを得ず行ったという解釈ではなく、積極的に生活を充実させるために行われてきたと指摘する。

こうした解釈を実証するために、藤井(二〇一〇、二〇一四)では明治時代以降の近代期における遠距離通耕に注目し、土地台帳とそれに付随する地籍図を用いて実証的に解釈しようとした。明治政府は地租改正を実現するために、土地に対して課す諸税の基盤として土地台帳を作成した。土地台帳に記載されている一筆一筆の土地の様々な情報(土地所有者だけでなく、所有者の字などさまざまな情報が記載されている)を用いることによって、より実証的な遠距離通耕の実態を明らかにすることに成功している。

遠距離通耕は一九七〇年代まで行われてきたということは、人頭税を納めなければならないという条件がなくなった明治時

代以降も行われてきたことを意味する。遠距離通耕をやらなければならぬ理由が1つ無くなったと解釈されるわけであるが、藤井(二〇一〇)では、竹富島、鳩間島において西表島への遠距離通耕が明治時代以降においても盛んになったことを土地台帳の資料を元に明らかにしている。

例えば、竹富島の人々は西表島の北東部において遠距離通耕を行ってきたが、明治時代以降、西表島の古見地区の住民が集落の近くに所有してきた水田が、一九五五年になるとほぼ竹富島の住民の所有物になっていったことを明らかにしている。高い島である西表島の集落では水田を手放していった一方、竹富島などの低い島では西表島の水田所有を拡大していったことを明らかにしている(藤井二〇一〇)。

さらに、様々な資料をもとに、土地台帳で明らかになった所有権移転の背景についても解説している。日清戦争以降、植民地となった台湾は、労働市場として拡大しており、八重山諸島のなかで台湾により近い島々では台湾への出稼ぎが増えていった。八重山諸島と台湾を結ぶ航路が充実していく中で貨幣・市場経済の中に組み込まれていった。地租改正による現金納への移行が相まって、現金収入への必要性が高まった。当時、主要な換金作物であった米作の必要性が増していったと、藤井(二〇一〇)は指摘している。

また遠距離通耕に欠かせない船舶の所有状況や改良についても史料から明らかにしており、竹富島で船舶の所有が増えていったこと、戦後、エンジンを動力とする船が増えていったこ

とにより遠距離通耕のための航海がスムーズに行われていった結果、遠距離通耕は戦後においてもしばらくの間衰退することになったことを指摘している。さらに竹富島では一八八〇年代から一九四〇年代にかけて人口が増加し、ピーク時には千人を超えている。竹富島の伝承では、竹富島は千人の島であり千人を越すと生活ができない、と言われているが、遠距離通耕によって千人を超える人口が支えられたと、藤井(二〇一〇)は指摘している。

このようにさまざまな史料を元に近代期における実態を検討した藤井(二〇一〇、二〇一四)では、遠距離通耕を1つの生態適応であると位置付けている。すなわち低い島の限られた資源を補うために高い島から得られるさまざまな自然資源を活用していったのである。その実態を藤井(二〇一四)では図2のようにまとめている。このように高い島と低い島のつながりこそが八重山諸島における人々の生態適応としてしているのである。

三、浮田、藤井による実証研究を踏まえて

以上のように、遠距離通耕の実態やその意味について考えるとき、浮田、藤井の2人の地理学者による実証的な研究が重要である。このような丹念に行われた実証研究は、遠距離通耕について研究・考察する際の共通基盤となっている。こうした研究が行われたことによって、遠距離通耕がどのように行われてきたのか実感することができる。

では一九七〇年代にまで行われてきた遠距離通耕は現在にお

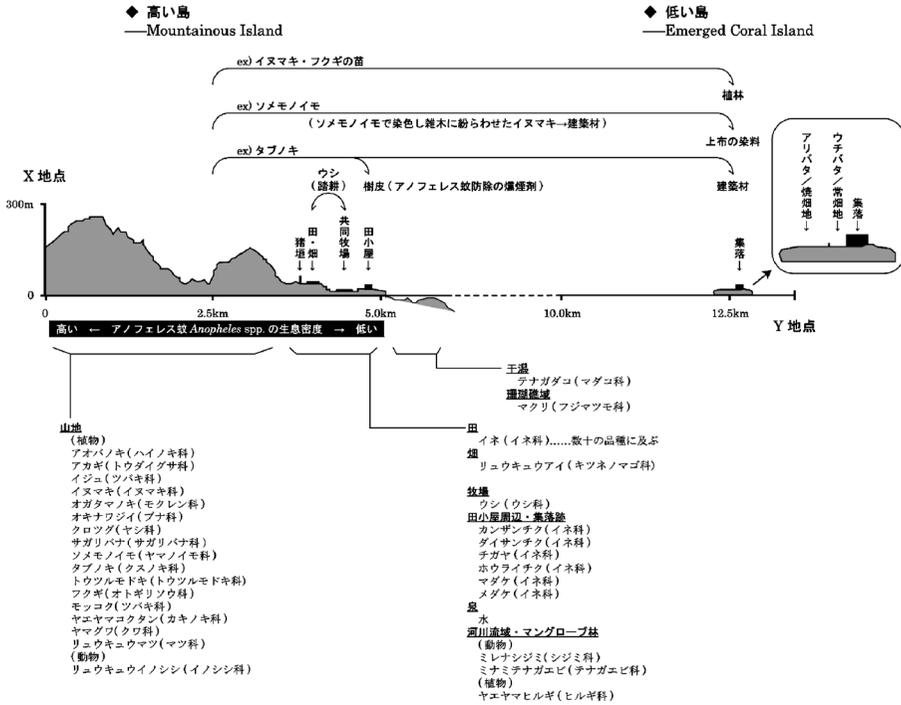


図2 生態利用の水平構造、藤井(2014)より

いてどのような意味を持つのであろうか。藤井(二〇一〇)は遠距離通耕を八重山諸島の人々による生態適応として捉えているが、置かれた自然条件の中で、その自然資源から得られる恵みを生かす営みが展開されていたということであろう。現在、西表島や竹富島に観光に出かけても、遠距離通耕のような高い島と低い島のつながりをイメージすることは難しい。竹富島の伝統的な家々を見た時、赤瓦屋根を拭くために必要な木材は西表島から調達されてきた歴史を考えると、目の前に広がっている竹富島の景観は人間の生態適応の結果であることを理解させるのである。

景観は地域の人々の生態適応によって生みだされる。竹富島の景観は、西表島への関係によって生みだされていることを考えると、八重山諸島の人々のたくましさ、したたかさ、を感じずにはいられない。

参考文献

浮田典良 一九七四。八重山諸島における遠距離通耕。地理学評論 47-8: 511-523.

藤井絃司 二〇一〇。近代八重山諸島における遠距離通耕の歴史的发展。地理学評論 83-1: 1-20.

藤井絃司 二〇一四。琉球弧・八重山諸島における通耕実践と生態資源利用—19世紀末期から20世紀初頭における「高い島」と「低い島」との往来をめぐる事例—。国立民族学博物館研究報告 38-2: 251-291.